

まなざされる身体

—ユニークフェイス、見た目の問題を見つめ直す—

石 里 繭 子

目次

はじめに

1. ユニークフェイスとは
 1. 1 「ユニークフェイス」と「異形」
 1. 2 いかによりユニークフェイスは研究されてきたか
 1. 3 ゴッフマンのスティグマ論

2. ユニークフェイスの生きづらさとは
 2. 1 五つの生きづらさ
 2. 2 作品から見るユニークフェイスの生きづらさ
 2. 2. 1 安部公房「他人の顔」に見るユニークフェイスの孤独
 2. 2. 2 よしもとばなな「海のふた」に見るユニークフェイスの生き方
 2. 2. 3 二作品に共通する生きづらさとは

3. 生きづらさの軽減のためには
 3. 1 社会的な不認知の軽減
 3. 2 対面的相互行為における困難の軽減

おわりに

参考文献

はじめに

高校一年生の時、古本屋で偶然、石井政之著「顔面漂流記—アザをもつジャーナリスト」に出会う。これは、出会いという言い方が正確だろう。一心不乱に読んだことをよく覚えている。その時の読書ノートが残っているので引用したい。「顔にあざを持つことは、体など目立たないところに傷があることとはどのように苦勞の量、質が違うのだろうか。しかし、見た目に関する苦勞をこれほど率直に詳しく書いた本に出会えたことは何にも代えがたい。ユニークフェイスの活動はぜひ支援してみたい。」稚拙ではあるが、この感想の根幹が、今も残っていると思っている。大学1年の時ゴッフマン著「スティグマの社会学」を読む。ゼミに入り、この文献をもう一度精読することでユニークフェイスとの関連が改めて見えてきた。

「人の価値は顔の美しさにあるわけではない。」これはいかにもあたり前のように聞こえる。しかしこの常識に反してユニークフェイス当事者は、顔にあざ、傷があることによって差別されている。そしてその差別は、この道徳的な考え方によって社会のなかでずっと隠されてきた。ユニークフェイス当事者は五体満足という意味では障害者ではない。その一方で普通の人があたり前に享受している匿名性がない。人間の価値は見た目ではなく内面的なもので決まるという言説は世間にあふれている。しかし、この価値観を強調することで、「たかだか見た目のことにこだわって、くよくよ悩むなんてつまらない生き方」という当事者の悩みをないがしろにしてしまう風潮さえあり、危険であると考え。ユニークフェイス当事者は侮辱の対象として、凝視する対象としての関心、どうやって接したらいいのかかわからない無視などという対応に疲れている。ユニークフェイスの人にどのように接したらよいのか、考えて行く課題であると感じている。本稿では、第一章でこのように不可視化されてきた問題を先行研究の購読を行い、明らかにしていく。第二章では、当事者が抱える問題を、5つに類型化するとともに、文学を手掛かりとして洗い出し、ユニークフェイス特有の生きづらさを可視化させる。第三章では、特に当事者に生きづらさを感じさせる「社会的不認知」と「対面的相互行為」における困難の軽減について考察する。加えて、どのように当事者、個人、社会が対処していく問題であるのかを考察することを目的とする。ユニークフェイスを、先行研究の購読、文化的側面から見つめ、定義の確認から、あるべき社会のありかたを探る。

1. ユニークフェイスとは

1. 1 「ユニークフェイス」という呼称

顔面など身体が目立つ部位に、アザや傷のような徴のある人で、「見た目」の問題を抱えている人を、「ユニークフェイス当事者」と呼び始めたのは、1999年に発足したセルフヘルプ・グループ「ユニークフェイス」である。そのため、「ユニークフェイス」には、セルフ

ヘルプ・グループと、その状態にある人を指す総称であると言われる。ただ顔、体にあざや傷があるだけでなく、もっと激烈な状態にあることを言う。世間では「お化け」「気持ち悪い顔」と認識されるような容貌を持った人たちのことを言う。海外では、「見た目の違い」(visible difference)とか、「顔面の奇形」(facial disfigurement)といった言い方をするが、日本ではまとめた呼称がない。そのため、この言葉ができた。当事者の多くは、高度医療機関にかかって治療を受けたが、完全に普通の顔に修復することができない。目立たない状態にまで治療できている人は確かにいるが、すべての当事者が病変を消滅させるかのようには完治することはない。経済的格差から治療を受けることができずユニークフェイス当事者になっている人もいる。医療技術も、医療経済も不完全であるため、当事者がいなくなることはない。当事者、すなわち疾患や外傷によって顔に著しい特徴を持つ人が、日本におよそ 100 万人いると想定される。日本にはまとまった統計データが無いが、イギリスの慈善団体“Changing face”が 2007 年に行った調査によれば、111 人に一人の割合でイギリスには当事者がいるとされている。人種や地域によって大きな差はないため、この人数が概算された。

「ユニークフェイス」と一括りにする前に、この呼称を使うことを再検討したい。先行研究については後述するが、その研究の中で、疾患や外傷による顔の特徴はさまざまな用語で表現されている。心理学者で当事者である松本(2000)は、従来の言葉を 3 つに分類している。第一に、*facial anomalies*(顔面の異常)や *malformation*(奇形)などの医学用語である。松本は、医学用語は難解であるうえ、当事者を傷つける可能性があるため適切ではないと主張する。第二に、*facial handicap* など、それが障害であることを強調する用語がある。松本によれば、顔にあざや傷があることが直接的に障害であるわけではないため、それを強調するのは問題が伴うという。第三に、*facial difference* や *visible difference* など、心理学研究において新たに考案された用語がある。*visible difference* は、「可視性—つまり人の視線—を介して容貌の差異が増幅されるということを抑えていて興味深い」ものの、日本語に訳した場合に「可視性の相違」「見た目の違い」となり、誤解を招くおそれがある。疾患や外傷のために特徴がある顔が一般的な「見た目の違い」に包摂されてしまい、その固有の問題が看過されることを懸念していると思われる。松本は、この 3 つに分類し、中立性やわかりやすさを考慮し、「疾患固有の容貌」という用語を提唱している。

しかし、著書において、顔にあざにある女性に焦点を当てた西倉(2009)は、この用語にも問題がないわけではないとしている。なぜなら、第一に、顔にあざのある女性たちの問題経験が、生物学的な視点に還元されるという危険性があるためだという。医療人類学者のクラインマン(1996)は、「病い *illness*」と「疾患 *disease*」という言葉に対比的に用いている。「疾患」が治療者から見た視点であり、病気を生物学的な構造や機能の変化と捉える言葉であると定義する。「病い」は病者やその家族から見た視点であり、「患うこと *suffering*」の個人的な経験をあらわす言葉である。つまり、「病者やその家族メンバーや、あるいはより広い社会的ネットワークの人びとが、どのように症状や能力低下を認識し、それとともに生活し、それらに反応するのかということを示すもの」なのである。クラインマンによるこの区別に従えば、顔にあざがあることを「疾患」と見なすのは、それを生物医学の問題として定義することを意味する。このとき、顔にあざがあることは単なる血管の異常に還元され、その個人的な経験は無視されてしまうからだ。疾患という言葉を採用すると、

固有の問題が看過されるという松本が危惧していることが起きてしまうのである。

西倉は、顔のあざを「病気」と捉えることも疑問が残るといふ。例えば、単純性血管腫という赤いあざのある女性は、医師の診断を聞くまでは顔のあざを「病気」と認識していなかった。血管腫は一般に、痛みや痒みなど違和感がなく、見た目のみの問題といえる。あざを「疾患」「病気」と規定すると、当事者が健康と病気の間、障害と非障害の間にあるという、自分という存在の位置づけがたさは見落とされてしまう。当事者は、自分の立場を非常にあいまいにとらえている。

石井(2000)は顔にあざや傷がある人を「障害者でも健常者でもない存在」として「異形の人」と呼んでいる。顔にあざのある人びとは、機能的には問題がないため障害者ではないが、一瞥しただけでわかる外見の特徴ゆえに特殊な社会的状況におかれるため非障害者とも区別されるというわけだ。

前述したように、ユニークフェイスは、この問題を可視化させるために作られ、認知を図るためにも一翼を担ってきた。一番知られていて馴染みやすく、かつ、特徴のある顔、という意味で、本稿では「ユニークフェイス」という呼び方で統一させる。

1. 2 いかによりユニークフェイスは研究されてきたか

今でこそ研究がなされてきているが長い間、ユニークフェイスの分野は学術研究が手つかずであった。大坊(2000)によれば「顔のテーマは人種、差別の問題にかかわりかねないことから、タブー視され、研究の対象になりにくかった経緯がある」と述べている。ブルとラムズィ(1988)も「『人がどう判断されるかにはルックスが重要だ』という不愉快な見解を科学的に証明するはめになるのを回避したのではないかと考える者も多い」としている。欧米では第二次世界大戦後から、戦争で顔を負傷した人に対する治療の必要性から、アメリカの形成外科の技術は目覚ましい発展を遂げるが、患者の心理・社会的困難についての研究は立ち遅れた。

こうした中、論文を発表し先駆者となったのが医療社会学者のマグレガーだ。マグレガーは、1949年から、研究チームにおいて、ユニークフェイスを心理学的・社会的・文化的観点から捉え、ユニークフェイスとパーソナリティの構造や発達の関係、対人関係や社会的適応に及ぼす影響、そしてこうした適応に形成外科手術が与える効果を研究する目的で、形成外科患者のインタビュー調査を実施した。多くの当事者が持つ共通した問題は、「見つめられたり、とやかく言われたり、他人からの質問」といった他者からの否定的反応であり、「職業を得ること、友達を作ること、結婚の機会、差別待遇に関するもの」であった。従来の心理学研究は、研究対象とする種類や発達段階において多様であるが、ユニークフェイス当事者が抱える困難を強調している点では一致している。

マグレガーはその後も研究を続け、1990年にユニークフェイス当事者における際立った否定的感情は「羞恥」であると述べている。この感情は彼らが経験している社会的相互作用の困難とも密接に結びついている。自分の顔は他と違うという羞恥は非常に耐えがたく、うつむいて顔を隠したり、視線を避けようとしたりする。「この感情こそが、異形の人とそうでない人との相互行為過程を特徴づけ、そして妨害する顕著な役割を果たしているのである」としている。

特に、他者との出会いにまつわる困難は、ユニークフェイス当事者が成人期に直面する重大な問題として研究成果が蓄積されている。それは、じろじろ見られる、ぎょっとされる、指をさされる、無遠慮に感想を言われる、顔のことにに関して立ち入った質問をされる、憐みや嫌悪の感情を向けられる、嘲笑されるなどさまざま。ブルとラムズィの研究によれば、このような否定的反応のために、ユニークフェイス当事者は「一般人の気楽さ(集団の中の匿名性)」を失うことになる。さらに、マグレガーは、当事者が「視覚と言葉の暴力」にさらされている、としている。私たちの日常においてごく当たり前の「人混みにまぎれる」という経験は、当事者からすればまさに特権といえる。

ユニークフェイス当事者は、私的領域に「侵入」されてしまうというこうした経験だけでなく、他者に「回避」されてしまうという逆ベクトルの困難も経験している。視線をそらされたり、無視され、避けようとされる。こうした回避や拒否は非言語的行為であり、言語的コミュニケーションと違い抑制が難しく、ほとんど自動的に伝わってしまう。

対面的相互行為における困難もある。当事者は凝視や無遠慮な質問を受け、他者との対面的相互行為に緊張や疲労を感じるが、これは当事者だけの問題ではない。当事者とそうでない人が対面する時、通常の社会的出会いと比較して、相互行為のルールが明確ではない。つまり、当事者と接する側は自分が何を言うべき/すべきで、何を言うべきでない/すべきでないのか、確信が持てないのだ。そのため、当事者と接する側の人間もまた、緊張や居心地の悪さを覚えることになる。

日本での研究はまだ始まったばかりだが、先駆的業績をあげたのは松本(2005)である。松本は、心理的問題として「対人関係の悩み」「自尊感情の低下」を挙げている。ユニークフェイス当事者にとって、顔を凝視され、その視線の中に相手の驚きや嫌悪を感じるのは日常茶飯事である。そうした経験を重ねるうちに、当事者は対人関係全般が苦手になる可能性が高いという。松本によれば、このような対人関係の困難が顕著にあらわれるのが、顔の印象が多大な影響を及ぼしていると考えられる初対面の人間関係、就職の困難、恋愛や結婚などの異性とのつき合いである。当事者は他人にじろじろ見られたり避けられたりするために、多かれ少なかれ、なんらかのかたちで自信を喪失すると考えることは難しくはない。対人関係の悩みと自尊感情の低下は、対人関係をうまく築けないことが自信の低下につながっていくというように、密接に関わりあっている。これらの心理的問題に加え、松本が強調している困難がある。それは、ユニークフェイスが「ほかの障害などと比較されやすい」という問題である。顔にあざや傷があっても機能制約はない場合が多いため、身体障害など機能制約を抱えている人々と比較されて「大した問題ではない」と言われてしまうのである。ユニークフェイス当事者は「障害者」と「健常者」のはざまにあるという言葉は、特徴のある顔ゆえに非障害者と区別されると同時に、機能制約を持たないがゆえに障害者からも区別されるというジレンマを見事に表現している。

1. 3 ゴッフマンのスティグマ論

多くの研究者が社会学者の E.ゴッフマンのスティグマ概念に言及している。ゴッフマン自身、著書である「スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ」の冒頭において、「生まれつき鼻のない娘」による絶望に満ちた手紙を引用している。「(前略)この頃、

ほかの女の子と同じようにボーイ・フレンドをもち、土曜日の夜にはデートをしたいと思うようになりましたが、誰も私を連れて行ってはくれません。というのは私には生まれたときから鼻がないからです(中略)。私は一日中鏡を見ては泣いています。私の顔の真中には大きな穴があり、みんなが恐がります。(中略)母は私を大事にしてくれます。でも私を見ると大変泣きます。(中略)こんな酷い目に会うなんて、私がいったい何をしたというんでしょう?(中略)生まれる前に、前の世で何かしたのかもしれませんが。(中略)私は自殺すべきでしょうか?」この記述にもユニークフェイスの生きづらさが如実に示されている。草柳(2004)は「逸脱」と定義された者はそれゆえの「生きづらさ」を経験することになり、それに何らかの対処をしていくことになる、という。その上で、ゴッフマンは「逸脱」の多様性に対して、一括した分析が可能な生活上の共通性に着目したとしている。ゴッフマンは、社会的期待から逸脱する望ましくない特性「スティグマ」を持つ者に焦点を当て、そのアイデンティティをめぐる固有の苦境を考察した。スティグマとは、もともとはギリシア人が使い始めた。「それは肉体上の徴を言い表す言葉で、その徴は、つけている者の徳性上の状態にどこか異常なところ、悪いところのあることを人々に告知するために考案されたものだ。徴は肉体に刻み付けられるか、焼きつけられて、その徴をつけた者は奴隷、犯罪者、謀叛人、すなわち、穢れた者、忌むべき者、避けられるべきもの(特に公共の場では)であることを告知したのである。」(ゴッフマン 1963=2001:13)未知の人が、われわれの面前にいる間に、彼に適合的と思われるカテゴリー所属の他の人びとと異なっていることを示す属性、それも望ましくない種類の属性——極端な場合はまったく悪人であるとか、危険人物であるとか、無能であるとかいう——を持っていることが立証されることもあり得る。このような場合彼はわれわれの心のなかで健全で正常な人から、汚れた卑小な人に貶められる。この種の属性がスティグマなのである。ことに、人の信頼/面目を失わせる働きが非常に広範にわたるときに、この種の属性はスティグマなのである。ゴッフマンによれば、3種類のスティグマがあるという。

- 1) 身体的変形
- 2) 精神異常、投獄、麻薬常用、アルコール依存症、同性愛、失業、自殺企画、過激な政治運動などから推測される性格の異常
- 3) 民族、国家、社会の階級、宗教などの集団に帰属される特性

スティグマの特徴として、スティグマのある個人が①人々の注意を引き、②出会った者の顔をそむけさせ、③その個人がもつ他の特性が無視されるようなものであり、④その特徴さえなければ問題なく通常の社会で受け入れられるはずのものとして挙げている。ゴッフマンの考えを利用すれば、ユニークフェイス当事者は、人が見ればすぐにその特徴が分かるため、身体的変形のスティグマをもった人達と言うことができる。ゴッフマンは、スティグマを持つ人が、「常人」、すなわち当面の特定の期待から負の方向に逸脱していない者、に包囲される生活誌の諸場面で、アイデンティティを管理しつつその苦境に生きる技法を巧緻に記述した。そこには、「逸脱的」マイノリティのアイデンティティと「生きづらさ」への対処を巡る、理解の枠組みの一つの典型を見出すことができる。

「スティグマのある人の学習過程には 2 つの段階があることが指摘された。まず常人の視覚を習得し、次にその視覚から見て彼が失格していることを理解するという二段階である。

恐らくこの次は、彼が正しくその種の人間であると証明された種類の人間を他人が処遇する仕方に適応することを学習するという段階である。さらにその後には現在の私の関心事、すなわちパスすることを会得する段階がくる。」(ibid.:137) パスすること、パッシングとは、「まだ露見していないが、〔露見されれば〕信頼を失うことになる自己についての情報の管理/操作」(ibid.80)のことである。スティグマ所有者は、常人のまなざしに縛られ、その視点から身の処し方を学ばねばならない。ユニークフェイス当事者は、一見してスティグマがあると分かるが、そうした人は両者の接触の行われる社会的場面は気づまりで表面的な相互交渉の場になるという独特の感情を持つ、とゴッフマンは指摘している。

キツセ(1980)によれば、ゴッフマンの描くスティグマ所有者は対面的相互行為における気づまりや当惑を周到に回避することで秩序を保持し、パッシング等のさまざまな情報操作を駆使してスティグマの不可視化に努めているという。これをキツセは「過度に社会化された」逸脱者の概念であると批判している。草柳による整理を参照する。ゴッフマンの描くスティグマ所有者は社会から付与されるアイデンティティの管理に腐心する。それに対してキツセのそれは、彼を不利な立場に置くアイデンティティをみずから引き受け、共通のアイデンティティを持つ人々と連帯して社会変革を要求する。すなわち、二者の議論におけるスティグマ所有者は、自己の問題経験への対処方法が異なるのだ。ただし、草柳によれば、ゴッフマンとキツセの議論いずれも、現代日本社会に必ずしもうまくあてはまらないという。

スティグマという言葉は、人の信頼をひどく失わせるような属性を言い表すために用いられるが、本当に必要なのは明らかに、属性ではなく関係を表現する言葉なのだ、ということは強調しておきたい。従来の研究では、人々がユニークフェイス当事者に否定的反応を向けるのはそれが望ましくない属性だからだといった説明に終始してしまっている。しかし、目を向けるべきはスティグマ的属性そのものではなく、それがスティグマとして生起する関係なのである。

2. ユニークフェイスの生きづらさとは

2. 1 五つの生きづらさ

西倉(2009)は五つの問題経験として(1)否定的な自己認知(2)対面的相互行為の困難(3)ライフステージごとに直面する困難(4)家族関係の困難(5)社会的認知の不足を挙げている。この節では、西倉のアイデアを参考に書すこととしたい。

(1)否定的な自己認知は、ひとつに顔にあざのある自己に対する否定的な考えであり、もうひとつはあざを(カムフラージュメイクなどで)隠している自己に対する否定的な考えである。本稿では一つ目を論ずる。西倉は二つ目を主に記したため、ここでは、ユニークフェイス当事者の日本初の体験談集石井・藤井、松本編著「見つめられる顔 ユニークフェイスの体験」(2001)を参照する。

顔面を含む全身に赤いあざを持つ菊山は、自分が生まれる前の家族写真を見ると、罪の

意識をかき立てられるという。すなわち、彼女が生まれる前の家族の平凡さは、「完全な姿」として残っているが、自分が生まれてきてしまいそれを乱してしまったという罪悪感があると語る。自分が生まれてこなければ、守られたはずの幸せは大きかったはずだと思いはいまだに胸中にあるという。菊山はいじめを長期に渡って受けたため、顔立ちをかりに気に入ってくれても、そのコンプレックスを多く抱えているので、顔だけでない問題が自分にはあるとしている。

顔のほぼ全体にあざのある鈴木(仮名)は、ずっと自分のあざのある顔が大嫌いだという。これからも好きになれないし、どうしたら好きになれるかも分からないと語る。ひとつだけ願いが叶うなら、あざのない顔になりたいとする。あざがない顔を想像すれば、このような悩みはなかつただろうし、もっとポジティブに生きられたらという。

このように、顔にあざなどがあるというだけで当事者は、気おくれを感じたり、消極的な気持ちを持っているといえる。

(2)対面的相互行為の困難は、対面状況で執拗な視線や無遠慮な言葉を投げかけられるなどの困難である。通りすがりの人や見ず知らずの人との匿名関係における困難といえる。

少し寄り道になるが、視線について考察する。石井(1999)は、自身の体験を次のように述べている。小学校に取材に行った石井は、子どもにあつという間に囲まれ、「気持ち悪い、変な顔!」というように冷やかしの声を浴びせられたという。しばらくして、大学生にもそのような視線や侮蔑の言葉を掛けられたという。そこで、石井は冷たい視線を浴びない世界はあるのか、と考える。海外では、日本ほどの経験をするとはほとんどないそうだ。しかし、事故によって顔を含む全身にやけどを負ったイ(2004)は、治療のため日本に滞在したときのことをこのようにいう。「数日前までいた韓国では、道行く人が歩みを止めてびっくりして私を見つめました。ところが日本人はわたしに関心を示そうとはしませんでした。人の迷惑になるようなことは絶対にしない日本人……(中略)わたしのことを二度見るのは韓国人だけです(わたしだけの日本人、韓国人判別法よ!)。」(イ 2004:188)このことを、イは「ありがたく、必要な無関心」としている。石井が言うように日本人は嫌悪感を露わにする人が多いのか、イが言うように韓国より日本の方が冷たい視線を感じないのか。世界中で日本がどのような視線を持つ人が多いのか、研究したものはないが、国によって視線の差異というものはあるのだろうと予想される。

第1章でも触れたが、ユニークフェイス当事者は、見知らぬ人に私的領域に侵入されてしまうという経験だけでなく、他者に回避されてしまうという困難もある。ゴッフマン(1967)の考えを参照する。ゴッフマンが取り組んだ研究対象は、人と人が身体的に居合わせるとき、何をすべき、すべきでないかという行為のルールである。彼はこれを「儀礼(ritual)」と捉えた。この儀式の基本を構成しているのが「敬意」である。敬意をもった礼儀の一例として、「回避儀礼」と「提示儀礼」の二つの分類に彼は注目した。(ゴッフマン1967)「回避儀礼」とは、相手の領域を侵さずに一定の社会的距離を保つ行為である。「提示儀礼」とは、これから生じる相互行為においてどのように扱うか相手に知らせる行為である。前者はこれをしてはいけないという「排除規定」であるのに対して、後者はこれをすべきであるという「採用規定」として定めている。見知らぬ人からの「凝視」や「質問」は、回避儀礼の欠落として理解できる。特に「質問」は、回避儀礼よりも直接的な侵犯で

ある。ゴッフマン(1963)は「目につく障害は(中略)誰もがそれを見ることができし、それについて質問することもできる。そして、どんな場合にも、それを見た人は相手に感想や評価を伝えたり、あるいは感想や評価を押し付けることができる」としている。「回避儀礼」も「提示儀礼」も、通常の相互行為においては無自覚のうちに維持されているものである。にもかかわらず、ユニークフェイス当事者はこうした相互行為が大きく<変形>してしまっている、と西倉は指摘する。

(3)ライフステージごとに直面する困難は、幼少期や思春期におけるいじめ、思春期以降の恋愛や結婚の困難、成人期における就職における困難だ。ライフステージが進展するごとに直面する問題である。

まず、いじめについてみていくと、長期にわたるいじめを受けた当事者は、自身のなさ、異性への苦手意識など、現在進行形の問題としてきわめて強固に結び付けられているという。多くの場合、他者の否定的な言動が、「自分の顔は他とは違う」と気づく最初の経験だ。そうした他者の視線を内面化する大きなきっかけとなる出来事なのである。

次に、恋愛・結婚についての困難についてみていく。先に述べた対面的相互行為は短期的なものであるのに対し、この問題は他者とのより長期的な関係における問題である。西倉が行ったインタビューによれば、自尊感情や相手からの回避以上に、幼少期より周囲から向けられてきたまなざしが恋愛・結婚の困難に深く関係していることを示唆しているという。西倉は女性当事者に焦点をあてたため、特に美醜の問題を恋愛・結婚に結び付けやすい、女性特有の劣等感を示した。

最後に、就労問題について見ていく。ユニークフェイスであることと就労の困難においては直接的な関係があることがインタビュー対象者からは分かる。当事者は否定的な自己認知や他者からの否定的な反応が原因で、就職しようという気持ちにさえなれないという問題がある。こうした問題が就職といういわば就労への入り口に立つ以前の問題とするならば、入り口に入って以降の困難がある。ユニークフェイスであるために顧客との接触を必然的に含むような仕事には就けず、職業の選択肢が制限されてしまうという問題である。さらなる問題もある。具体的には、障害者施設職員であるため、利用者から顔に関してストレートな言葉を投げかけられることや、顔にあざなどがあるせいで仕事上のミスを過度に叱責されるのではないかという恐怖感を感じる、などである。付け加えておきたいのは、就労に大きな影響を及ぼしているものとしてカムフラージュメイクが挙げられる。カムフラージュメイクとは、あざの色素や皮膚の凹凸を目立たなくするメイクアップ法のことである。それによって「普通」の外見に近づき、職業選択の幅を拡げているが、それゆえの困難もある。本稿ではこれは今後の課題とし、少し言及するのみとしたい。

(4)家族関係の困難について述べる。家族は執拗な視線や無遠慮な質問から逃れられる関係であると同時に、みずからがスティグマを持つ者であると認識させられたり、治療の方針を巡って対立したり、時には自己の問題経験が否認されたりする存在である。そこから生起する問題である。主に当事者を産んだ母親は、ユニークフェイスの子どもを産んだ、という自分を責める傾向にある。対面的相互行為の困難から解放される「安全」な関係であると同時に、母親のことを考え、感情の表出や問題経験の表明を抑制しなければなら

いという意味ではとても窮屈な関係を持つ当事者もいるという。具体的には、顔の話題をほとんどタブーとし、母親がことあるごとに泣いたり謝ったりするために、顔について学校で何か言われたりしても、「これだけは言うてはいけない」と思っていた当事者が西倉のインタビューで示されている。さらに、他の当事者で、身近な存在であるはずの母や姉から、自分が経験している問題が過小評価され、ときに否認されてしまうという不満を口にしている。カムフラージュメイクの販売員は、顔にあざがあることがむしろ要件であるため、適職でないかと考えた。しかし、姉に話すと、「同じような境遇の人同士で傷をなめ合うように生きていくのはどうなのか」という趣旨であっさり却下された。姉としては、「あざを理由にしないで頑張してほしい」というメッセージだったのだろうが、その言葉は、当事者でないと家族でも共感するのは難しいという現実を突き付けている。家族はサポートやケアをする存在とするのは的確でない。葛藤、衝突、軋轢など、様々な要素が入り組んだものである。

(5)社会的認知の不足は、ユニークフェイスという問題に対する社会的認知の不足や誤りによって自己の問題経験が適切に理解されないという問題である。「普通」の顔を持っている他者に、ユニークフェイスの問題を表明するが、問題を過小評価されたり、「見た目にとだわるのはつまらない」などの、問題を表明すること自体が逆に問題とみなされる困難であった。終章でも考察することとする。

2. 2 作品から見るユニークフェイスの生きづらさ

2. 2. 1 安部公房「他人の顔」に見るユニークフェイスの孤独

まずは安部公房の「他人の顔」である。あらすじは以下のようなものだ。

研究所に勤務する男は、実験中の事故により顔一面に、まるで蛭の様なケロイド癩痕を飼い込んでしまった。自分の顔を失った男は、その苦悩から逃れるため、プラスチック製の仮面を製作し”他人の顔”を手に入れる。男は誰でもない他人になりすまし、最大の目的であったおまえ(妻)の誘惑にも簡単に成功する。しかし自分という夫がありながら他人と密通するおまえへの不信感は募り、仮面に嫉妬しながらも関係をやめられない自分に苦悶していく。

ここからは、実際に安部が書いた文から、ユニークフェイスの生きづらさを表している文を抜き出しながら論を進める。

男は、自分の癩痕に対していつまで経っても慣れることができない。顔に巻いた包帯を取り換えるにあたり、「…まったく、なんという醜悪さだ！ほとんど……日課にして繰返していることなのだから、もうそろそろ馴れてくれてもいいように思うのだが……」「そのことさらしい驚きに、いっそう、むしゃくしゃさせられるのだ。考えてみれば、なんの根拠もない、非合理的な感性である。たかだか、人間の容器、それもほんの一部分にすぎない顔の皮膚くらいに、なんだってそんな大騒ぎしなければならないのか。」(安部 1964:15)「どう考えてみても、人間という存在のなかで、顔くらいがそれほど大きな比重を占めたりするはずがない。人間の重さは、あくまでもその仕事の内容によって秤られるべきであり、それは大脳皮質には関係しえても、顔などが口をはさむ余地のない世界であるはずだ。た

かだか顔の喪失によって、秤の目盛に目立った変化があらわれるとすれば、それはもともと内容空疎であったせいにはかなるまい。」(ibid.:20)これは、途中でユニークフェイスとなった自分への否定的な自己認知、それに拘泥させられてしまう自己嫌悪といえる。

高校の友人である古生物学者に仮面を作るための情報収集をするために断りきれずに会う場面である。男はそこで街での容赦ない視線を感じる。「どんなに遠慮勝ちな、さりげない視線にでも、そいつを受ける身になってみなければ分からない、腐蝕性の恐ろしい毒をまぶした針が隠されている。街はぼくを、くたくたに疲れさせてしまうのだ。」(ibid.:51)ユニークフェイス当時者の誰もが感じる視線の問題に触れている。男が電車に乗った際も、その視線はいつも付きまとう。子どもの視線は残酷なものだと何人かの当事者が触れているように、ここでは5歳ほどの男の子の凝視に耐える男の様子である。「…じっと僕に眺め入っているのだ。驚異、不安、怖れ、発見、疑惑、ためらい、陶醉……と、好奇心のすべてを、そのちっぽけな臉の下に詰めこみ、ほとんど無我の境地におちいつているらしい。」(ibid.:85)その視線により男は冷静さを失い、繃帯を取って見せてやりたい衝動に駆られるが耐える様子が描かれている。

男は、やがて精巧な仮面を完成させ、意気揚々と街に出る。顔をある意味で回復させた男は、まるで別人格を得たような振る舞いをする。仮面に似合った洋服を誂え、空気拳銃までも手にする。自分が自分であることを疑うような行動に複数出る。自身、というよりは自身より気が大きくなった自身を取り戻す過程は、カムフラージュメイクをすることで得る当事者もいるが、それよりはカムフラージュメイクをしたことであぎを隠しているという自己に対する否定的な考えを持つ方が多い。変装している、自分を偽っているような感覚、とは石井(1999)も述べている。そのことを男も体感する時が来る。妻であるおまえを誘惑する際のことだ。仮面を装着している自分と素顔の自分との違いを明記している。「そう、ぼくと、仮面とは、それほどまでに遠く、目くらむほどの深淵をはさんで、へだてられてしまっていたのである。しかし、違うといっても、わずか数ミリの顔の表面のことだけで、あとは一切共有しているのだから、単なる言葉の綾とも取れるかもしれないが…」。(ibid.:270)しかしここで、男はその違和を「仮面は、ぼくの苦悩を吸収し、それを養分に変える能力をもっている」(ibid.:269)ものとし、おまえを仮面の姿で手に入れることを可能にさせたとして、目的を達成したと思いつむ。ただし自分の動機が不明瞭になっていくのをおまえとのやり取りの中で感じ、不安になる様子が描かれている。男は妻の誘惑に成功する。それもいと簡単にである。この簡単さが妻の不貞を表すものとして男は感じ、訝りや焦り、怒りを感じつつ、妻との関係を続ける。

男がその後、研究所に出勤して、ある事件が起こる。実験室に集まっているグループがあったので男が近づくと、慌てて朝鮮人の渡航問題を何とかするための署名用紙を隠した。咎めてもないのにその研究員はくどくどと詫びはじめ、気まずい空気になった。男は次のように思う。「……なるほど、顔のない人間には、朝鮮人のために署名をする資格もないというわけか。むろん、助手に、悪意はなく、おそらく直感的に、ぼくを刺戟しかねない要素があることに気付いて、むしろ憐みの気持ちから敬遠してくれたのだろう。たしかに、最初から人間に顔がなかったとしたら、日本人だとか、朝鮮人だとか、(中略)、そんな人種差別による問題など、起こりえたかどうかとも疑わしい。」(ibid.:292)しかし、日本人とは違った顔を持っている朝鮮人に寛容なその助手が、顔を喪った男にどうしてこうも分け隔て

るのだろうか。顔の喪失が「普通」の顔とは思った以上に違うことをまざまざと感じる出来事である。顔という、見えるが見えない壁が、行く先々に立ちはだかっていることが分かる一節である。

男は何気なくつけたテレビで、黒人暴動のニュースを見て、いたたまれない気持ちになる。「もつとも、ぼくと、黒人とのあいだには、偏見の対象にされているという以外には、ほとんどなんの共通点もない。黒人には、結び合う仲間がいるが、ぼくはまったくの一人だけだ。黒人問題は、重大な社会的問題になりえても、ぼくの場合は、あくまでも個人的な枠にとどまり、そこを一步も出るものではありえないのだ。」(ibid.:314)ユニークフェイス当事者の運動がない時代、障害の社会モデルの考え方がない時代に書かれたものであるから、当然だが切実な記述である。前時代はもっと差別があったのではないかと感じることは、障害者分野ではよくある。逆に、傷痍軍人が街に多かった戦後すぐは、身体障害者が世間的な存在であったのかもしれないとも考えられる。東京オリンピックが開催された年に刊行された本書が置かれた時代的背景は、都市の景観が整備され、経済成長に国民の目が行き、違った見た目を持つ者に対して思いやりがあるとは言えなかったのではないかと推察する。そのようなところから、男の孤独感が浮かび上がってくるように思われる。自分と同じような顔を失くした男女が集まった時のことを男は想像する。「暴動という嵐の中に、一兵士として埋没してしまいたいという、願望にせき立てられていたらしい。」(ibid.:314)確かに、兵士であれば、匿名性は重視され、顔を持たなくても支障がない。しかしこれはあくまで空想であることに気づき男はうんざりする。

物語は結末を迎える。おまえは男の変装に最初から気付いていたことが置手紙に記されていた。男は驚き、恥辱感でいっぱいになる。男は仮面制作の始めに、暗闇に身を隠すようなつもりで入った映画館で偶然見た映画について書く。何気ない気持ちで入ったそこで上映されていたのは、顔の半分に被爆による火傷のある娘の話だったのである。兄との会話からにじみ出る、娘の苦悩、絶望感が描かれている。「(筆者注:娘の発言)―戦争、まだ自分、始まりそうにないわね。―しかし、その娘の調子には、他人を呪うような調子はみじんもない。(中略)ただ、戦争が始まれば、一挙に事物の価値基準が転覆し、顔よりも胃袋が、外形よりも生命そのものが、はるかに人々の関心の的になるはずだと、素朴な期待をよせているだけらしいのだ。」(ibid.:334)「戦争が、そんな風に、まるで誰かの手紙でも待っているような調子で語られるということ自体が、なんとも痛々しく、やりきれない雰囲気をもし出す。」(ibid.:334-335)被爆した彼女が戦争を待つとは、通常感覚では理解しがたいものがある。ただし、戦争によって価値観のシフトが行われる可能性があり、そこに期待を寄せているのならその思いも分かるところがある。しかしそれほどまでに外見の差異が彼女に与えた影響は大きく、作品中の映画の中の描写では流れるようなよどみなさであるが、内面の葛藤はもっと生々しいものだろう。彼女は兄と語り合い、兄が眠りに落ちたあと、海に身を投げて自殺する。兄が眠る前に彼女は接吻を求める。その場面に対し、男は妻に「それでは聞くが、あの映画の中で、兄が接吻したのは、妹のどちら側の顔だったのか？答えられはすまい」(ibid.:340)と問いかける。しかし、あとがきで大江(1968)が述べているように、「確かに答えられないのは妻のみならず、われわれすべてなのである。おそらくは主人公にもまた、答えられはしないのだ。」としている。大江によれば、それは男が見た映画自体、絵空事にすぎず、現実味がないという。創作作品の中の創作であるから、

そのように感じられるかもしれないが、果たしてそうだろうか。綺麗な方の頬に接吻をしたいと思う者は多いのかもしれない。しかし彼女の苦悩を知り、そこに寄り添っていた兄であれば、火傷のある頬に接吻をしたのかもしれない。これは筆者の想像の域を出ず、分からないことではあるが、分からないと断定するのではなく、想像することが小説の醍醐味ではないか。

物語で何度も登場するフレーズに、「通路」というものがある。これは初めごろから出てくる。男は、仮面作製にあたって、プラスチックによる人工器官を作っているという、K氏に話を聞きに行く。そこでK氏は、男に、今は周囲の人の記憶の中に男の顔のイメージがあるが、次第にその記憶が薄れ、顔を知らない人々も出てきて、ついには生きながらにして世間から葬り去られてしまう、と説く。男は怒りを露わにする。K氏は続ける。同じ身体障害でも、肢体不自由者、視覚・聴覚障害者は珍しくないが、顔のない人間を見たことがあるか、その顔は一体何処に蒸発してしまったかと問う。男は知らない、他人のことに興味はない、とさらに怒る。K氏はひるまない。「どうも、よくお分りになっていないらしい。顔というのは、つまり、表情のことなんです。表情というのは(中略)、要するに、他人との関係をあらわす、方程式のようなものでしょう。自分と他人を結ぶ通路ですね。その通路が、崖崩れかなにかで塞がれてしまったら、せつかく通りかかった人も、無人の廃屋かと思って、通り過ぎてしまうかもしれない。」(ibid.:37)「幼児心理学なんかでも、定説になっていることですが、人間というやつは、他人の目を借りることでしか、自分を確認することもできないものらしい。白痴か、分裂病(原文ママ)患者の表情をごらんになったことがありますか？通路をふさぎっぱなしにしておく、しまいには、通路があったことさえ忘れてしまうものなのです。」(ibid.:38)男は受け入れかねる考え方として拒絶する。顔に縛られまいとするあまり顔を過小評価しているからではないかと自問自答するのだが、結局は終盤までこの「通路」の考え方に拘る様子がうかがえる。顔を手に入れるという名目がある以上、顔の役割は大きく、顔が他人と自分を結ぶということを少なからず信じていなければ、ここまで執念を燃やして仮面の製作に取り組まなかったと言っても良いと思われる。

顔が持つ美醜ではなく役割はユニークフェイス当事者でもなければ気に留めないかもしれない。「私が他人の表情の中で生き、また他人が私の表情の中で生きているように思う。」これはメルロ＝ポンティの言葉であるが、男の手に入れたかったものは、このような他者との共感のプロセスだったのではないか。顔というものに関わり生きている人間の存在の不安定さ、あいまいさが本作では明らかになる。三島(1965)は次のように評している。「顔はふつう所与のものであつて、遺伝やさまざまの要因によつて決定されてをり、整形手術でさへ、顔の持つ決定論的因子を破壊しつくすことはできない。しかも顔は自分に属するといふよりも半ば以上他人に属してをり、他人の目の判断によつて、自と他と区別する大切な表徴なのである。つまりわれわれは社会とのつながりを、自我と社会といふ図式でとらへがちであるが、作者はこの観念の不確かさを実証するために、まづ顔と社会といふ反措定を置き、しかもその顔を失はせて、自我を底なし沼へ突き落とすことからはじめるのだ」。自分の顔は多くが他人に属しており、社会のつながりは自分の顔によつてもしかしてできているのかもしれないと思わせる。自分の顔として存在をつくりあげるものとはどこにあるのだろう。他人の顔をとおしたのものの中にあるのだろうかと考えさせられる。ユニーク

フェイスという観点で読むと、ケロイド癬痕がある男は救われない人間として描かれる。男も、「醜いあひるの子の物語は、かならず白鳥の歌でしめくられるものと相場が決まっているらしい。御都合主義もいいところである。」(ibid.:338)としている。ユニークフェイスを持つ者が救われないと描くことが当たり前だと感じてはいないだろうか。そのような人間像を無意識に期待していないかと疑問を抱くところである。作品全体を通して、顔というテーマに正面からぶつかっていったものであり、他に類を見ない斬新な着想である。一文一文が示唆に富み、安部自身は当事者でないにもかかわらず、臨場感や実際の生きづらさをありありと表現している。

2. 2. 2 よしもとばなな「海のふた」に見るユニークフェイスの生き方

次によしもとばななの著である「海のふた」(2004)だ。「他人の顔」と比べると読みやすく短いものだが、ここにもユニークフェイスである登場人物が現れる。あらすじは、ふるさと西伊豆の小さな町は、海も山も人も寂れてしまっていたが、実家に帰った「まり」は、ささやかな夢と故郷への想いを胸に、大切な祖母を亡くしたばかりの「はじめちゃん」と一緒に大好きなかき氷の店を始めることにする、というものである。はじめちゃんの顔や体の右半分は小さいころに負ったというやけどのせいでまだらに真っ黒になっているという、ユニークフェイスの設定である。

書き出しからよしもとはこう書く。「(前略)人のいるところに近い神様たちは、みんな恐ろしい外見をしているみたいだ。(中略)それは、きっと身を守るためでもあるけれど、なによりも、人の心を試すためなのだろう。その見た目をのりこえてきたものだけが、その繊細な魂の力に触れることができるから。」(よしもと 2004:9)はじめちゃんにも何か魔術的で神聖なところがあったとする。ユニークフェイス当事者は神ではないが、恐ろしい外見、「お化け」と認識されるような外見を持っているとは定義されているところだ。確かにそのような見た目は、人の心を試すのかもしれない。当事者が全て繊細な心を持っているのではないが、はじめちゃんの場合は、「このやけどのこと、嬉しいと思ったことはなかった。でも、このせいで、私は他の人よりもずっとたくさん、考える時間をもらった。」(ibid.:94)としている。見た目に関して考えることは、自分の見た目だけのことに限らず、「他人の顔」にも通じることだが、自分と社会の繋がりを考えることにもなる。顔にあざのある当事者の町野(1985)は、「自分自身を考えること＝あざの自分と対面すること」であるとし、常に自己について思考を巡らすことに、あざがつきまどってきたという。町野は人並みに見られる対象として化粧をしたため、あざという深くて重いコンプレックスを化粧の下に埋め込んで他人に対してあざをタブーにしたといい、それゆえあざを巡る自分自身について考えないようにしてきたが、結局のところ、自分と向き合わなければ手記は書けない。石井(1999)も、エピローグにおいて、「アザは私の人生を決める独裁者であった。」と書き、どんな決断をするときも原動力になっていたのはあざだったと述べている。ユニークフェイス当事者は、生きづらさの分だけ、非当事者よりもよく自分について考えているといえそうである。ユニークフェイスであることは、思った以上に密接に自己理解と繋がっているのである。

よしもとはまりとはじめちゃんの出会いの場面で「人と人が出会うとき、ほんとうは顔なんか見ていないのだと思う。その人の芯のところを見ているのだ。雰囲気や、声や、匂

いや……そういう全部を集めたものを感じとっているのだと思う」(ibid.:10)と書く。安部の描いた男は顔に固執するが結局は精巧な仮面はたいした効果を現さなかった。そうした意味では、顔はよしもとの著すように、存在としてあいまいなのかもしれないという可能性が感じられる。

まりやはじめちゃんは、所々言及するものの、見た目にとられるということがなく、夏の光の中で物語が進む。はじめちゃんが恋人に関して話をするとき、「私にこのやけどのあとがあるから、好きなんじゃないかと思わせられるところがあるんだよね、その人……もし私がこうでなくても好きだった？ってね。そこまで思い入れた？って思ってしまうんだよね。」と話す。まりはそれに対し「(中略)そこがはじめちゃんのよさをひきたててるんだもん、仕方ないよ。」と返し、さらに「だって、ほんとうだもん。そのやけどのあとは、はじめちゃんをいっそう深く魅力的に見せてるからね。より神秘的に、よりはじめちゃんらしく。」と続ける。これを聞いたはじめちゃんは、「(中略)そう言ってもらったら、突然、全てがなんでもないことに思えてきたよ。」(ibid.:113-114)と答える。ユニークフェイスであることが自分の良いところを助長させ、魅力的に見せる、というのが主張である。前述したように、当事者は普通より多く自己について思考し、自分を理解しようとする分、年齢より老成し、他者へのまなざしが独特であることがある。それが内面的なものとしたら、外見的にそう思わせる要因として、内面的なものが滲み出たものとも言えたり、ユニークフェイスが単純に珍しい外見で、それが希少性や神聖性を持つと考えられるかもしれない。

この物語でも、周囲の目が語られる。「この町の人のはじめちゃんのやけど跡にぶしつけない言葉をかけたりはするけれど、わりとあたたかい感じだった。それにしても、そのあたたかさとは別に、客商売とはそういう意味ではとてもつらいものだ。人前に毎日出るのは、見た目が普通の人にさえ弱っているときにはほんとうにきついものだ。」(ibid.:156-157)客商売、接客は、顔が見られる仕事だ。西倉(2009)がインタビュー調査した A さんは、大学時代にアルバイトをするが、それらの店では、アルバイトの多くが A さんと同年代の女性であるなかで、彼女だけ配膳や、受付の仕事はさせてもらえず、厨房やガソリンスタンドでの洗車など、顔が目立たない「奥の部署」に配置されたという。某衣料品ブランド店がショップ店員採用の際に美形の者のみを雇い、そのブランドの服を売るとしても、「われわれはクールで見た目の良い人々に服を売りたい。それ以外の人々には売りたいくない」などと発言し、物議を醸したことがある。ユニークフェイスは美醜の問題とはまた別のものであることを西倉は指摘している。当事者は<美しくない顔>であるがゆえの問題経験ではなく、<普通でない顔>であるがゆえのそれとしてとらえているという。それゆえ、単純な問題構造とはいえないが、客を直接相手にする仕事に際しての顔の問題は、普通でない顔を持つ当事者にとっては深刻である。周囲の目に関する場面がまだいくつかあるので紹介したい。まりははじめちゃんを誘って喫茶店へ向かう途中、まりが昔付き合っていた男の子に出会う。「『この子は、はじめちゃん。(中略)この夏、うちに住んでいるの。』私は言った。彼ははじめまして、と言った後、はじめちゃんの顔を見てぎょっとした。そして、私の目をしっかり見て、『わかったよ』という顔をした。その『わかったよ』が出すぎてもひっこみすぎてもいなかったので、私は彼のどういうところをうんと気に入っていたかを思い出すことができた。」(ibid.:101-102)この、「出すぎてもひっこみすぎてもいけない承認のまなざ

し」は終章で触れることにしたい。彼は物語の終盤、3人で海岸にてたき火をするときも「君、火がこわいっていうこと、ないよな？」と聞き、まりは「はじめちゃんにそう聞くようなところが、泣かせた。」と思う。外傷でユニークフェイスとなった者は、その外傷を負うことになった原因に深いトラウマを持つ者も多い。それに対する配慮は必要であるが押しつけがましくない彼の言い方は読者にも伝わってくる。

作品は全体を通して心地よいものである。一夏の物語で終わらず、ユニークフェイスのはじめちゃんは全体に重要なアクセントをもたらす。派手な演出や奇想天外なドラマや愛憎劇ではないが、読後はさわやかなものだ。

2. 2. 3 二作品に共通する生きづらさとは

さて、二作品を取り上げ、ユニークフェイスであることで体験する様々な事象をみてきた。フィクション作品とはいえ、いや、だからこそ、実際の生きづらさが明確に凝縮されていると分かる。5つの生きづらさを参考にすれば、「他人の顔」ではいつまでも自分の顔に慣れることができないことや顔に対するこだわりを拭えないことは、否定的な自己認知といえる。妻との関係に激しい違和感を覚え、もう一度妻とやり直したいという思いを持っていた。これは家族関係の困難に結びつく。「海のふた」では、はじめちゃんは自分の傷に対して良かったと思ったことはないなどと語り、様々なことを乗り越えながらも自己認知に関しては否定的感情を持っているといえる。本稿では触れなかったが、はじめちゃんが大切に思っている祖母が亡くなると、途端に遺産目当ての親族が強欲な態度を見せ始める。はじめちゃんはそのことで疲れ果ててしまう。その見た目から、どうしても弱く見られてしまうはじめちゃんは、心労も多く、そのためにまりの住む土肥に休息のためにやってきたという経緯があった。これは、家族の死というライフステージにおける困難ともいえるし、親しかった親族を家族と捉えれば、家族関係の困難とも取れる。特にこの二作品で挙げられている生きづらさや経験とは何だろうか。両作品ともに、視線の問題と周囲の理解の問題について挙げられていたのではないか。視線について言えば、「他人の顔」では街で容赦ない視線を感じ、それが男を疲れさせてしまう。「海のふた」では、内面に関する記述が多いが、やはりぶしつけなまなざしや初対面での反応について触れられている。周囲の理解については、「他人の顔」では、男は妻からの理解が得られないために仮面の製作に駆り立てられる。「海のふた」では親しい仲のまりや家族には十分な理解がされ、生きづらいという表現は少なかった。しかし、そうした親密な仲で物語が展開されているということもあり、その圏外ではどういう理解がされるのだろうか。次章では、これらの問題について考察していきたい。密接に関わっているといえる、対面的相互行為の困難と、社会的不認知についてである。本稿では、この二つの問題を個別に考えるが、この問題は決して分かれているとはいえない。相互に繋がっている問題であるということに留意する。

3. 生きづらさの軽減のためには

3. 1 社会的な不認知の軽減

ユニークフェイスという問題や当事者が抱える生きづらさは、社会的にほとんど認知されておらず、障害者問題や障害者が抱える生きづらさと比較されて過小評価されるなど、依然としてメジャーな問題にはなりえていない。そのため、当事者の多くは孤立しており、声をあげることさえできないでいた。その意味で、ユニークフェイスの問題は社会問題としての位置づけを獲得していない。

ユニークフェイスという問題に対する社会的認知の不足を改善するための手立てを考察する。ここからは、「障害」を「機能制約」の意味で用いる。ユニークフェイスは、前章でも示したが、どうしても「世の中には手足のない人だっているのに、たかが外見のことぐらいで」とか、「五体満足な体に不満を抱くのはぜいたくだ」など、自分が問題として表明しているのに周囲がそれ自体を問題視するという傾向がある。主に身体障害と比べられることに着目すべきである。身体障害と比較されることでユニークフェイスが過小評価され、結果的に存在しないものとして扱われることもある。これは当事者にとって、自身の辛さを否定された感覚になる。どのくらい身体的に不自由かという機能制約は生きづらさに比例する、という考え方が流布しているように思われる。

藤井は、著書にて当事者を「容貌障害者」と呼び、自らもそう名乗っている。身体障害者、アルコール依存症、ひきこもりといった問題は社会に広く認知され、多くの研究や支援がなされている。しかし、「容貌障害」という問題を取り巻く社会の現状は、これらとはあまりに対照的である。藤井は、「私のように、(中略)顔に障害を持つ人は日本に大勢います。しかし、福祉関係の法律を見ても『容貌障害』という言葉は出てきません。社会の中にも、容貌の問題は障害であるという認識は薄いようです。」(藤井 2005)とし、容貌の問題は認知すらされていないと述べる。藤井が着目するのは、「容貌障害者」が直面している困難と、「容貌障害」に対する社会的認知のあいだにある果てしないギャップである。明確に偏見、差別、蔑視があり、生きづらさがあるにも関わらず、それらが社会的に俎上に載せられることは全くなかった、没問題化していたとあってよい。藤井の主張は、すでに社会的に認知されている「障害」問題として自分たちの生きづらさを訴える、すなわち「障害」に包摂するという考えかたである。藤井にとっての「容貌障害」とは、自分たちの生きづらさを声をあげて表明し、なおかつその解消を模索していくための言葉だといえる。

多くの場合、ユニークフェイスは機能制約を伴わない。そのため、機能制約という観点から身体障害者と比較してしまうと、例えば肢体不自由、全盲などの身体障害に比べて「取るに足らない問題」だという理解につながるのはごく当然である。しかし、ユニークフェイスを機能の問題とすべきでないという考え方があり。性質の異なる問題を抱えている物の生きづらさを比較するのはナンセンスであるということだ。ユニークフェイスの問題は、他者からの見られ方、「普通とは異なる」という見られ方をするという意味で、極めて「社会的な問題」なのである。当事者の生きづらさが機能制約という観点から「計測」されたりするのは、こうした社会的側面が見落とされているためだ。ユニークフェイスと「機能

的な問題」を切り分け、それはまさしく「社会的な問題」であることが認識されない限り、当事者の問題経験を可視化していくことはできない。身体障害の一類型にユニークフェイスが分類され、「機能的な問題」との違いが曖昧になってしまうことが危惧されるのであり、障害とは切り離して考えられるということである。

以上のように、ユニークフェイスを障害に包摂するという考え方と、障害から切り離すという二つの考え方を示した。これらには共通点と相違点がある。以下ではこの二点について考察を深めるため、「障害の社会モデル」を参考に論じていく。星加によるディスアビリティ論を参考とする。従来、障害の問題とは障害の身体的、知的、精神的機能不全の位相がことさらに取り出され、その克服が障害者個人に帰責されてきた。これを「障害の個人モデル」という。(星加 2007) それに対して障害当事者からの問い直しの主張を取り込んだのが「障害の社会モデル」である。これは、障害の問題とはまず障害者が経験する社会的不利のことなのでありその原因は社会にあるとするものである。この障害のパラダイムシフトによって、従来個人の機能的特質に起因する「個人的」な問題として扱われてきた障害者問題は、社会的な解決が進んでいないことのみならずその発生が社会に源泉を持つという意味で、きわめて「社会的」なものとしてクローズアップされてきたのである。(ibid.:38)石川(2002)によれば、ディスアビリティとは、作為的、不作為的な社会の障壁のことであり、それによって引き起こされる機会の喪失や排除のことであり、だからディスアビリティを削減するための負担を負おうとしない「できなくさせる社会 **disabling society**」の変革が必要だと主張されたのである(石川 2002:26)、としている。障害を個人的次元(インペアメント)と社会的次元(ディスアビリティ)とに切り分け、「障害の焦点をインペアメントからディスアビリティに移行させた」(星加 2007:38)のだ。こうした考え方は、ユニークフェイスにも適用できるのではないか。つまり、顔にあざがあることそれ自体によって不利益が生じているのではなく、顔にあざがあって困るような社会であることそれ自体によって不利益を被っているのだと主張できるのではないか、ということである。このように、障害の社会モデルを適用すると、ユニークフェイス当事者が被っている不利益をうまく説明することができる。

ユニークフェイスを障害に包摂するという考え方と、障害から切り離すという二つの考え方には、二つの共通点がある。一つは、ユニークフェイス当事者が直面している問題は社会的に構築されたもの、つまりディスアビリティであるという認識である。もう一つは、身体障害者の生きづらさ(=ディスアビリティ)と比較されることで、ユニークフェイス当事者が経験している生きづらさが軽視され、とき存在しないとされてしまうという問題意識である。しかし、解決策をどのように講じるかは、両者で異なってくる。

社会的に形成されたディスアビリティの解消方法について、二つの考え方を確認していく。ユニークフェイスを障害から切り離すという方は、顔のあざを「普通とは異なる」と否定的に意味づける社会がもたらすディスアビリティについて、その社会的責任を追及している。手術やカムフラージュメイクをせず、あざのある顔で生きていくことを本人が望んでいるのにも関わらず、社会がそれを認めないとするならば、問われるべきは社会の側なのだ、ということである。障害に包摂するという考え方も、ユニークフェイス当事者が社会からの差別・偏見・蔑視というディスアビリティに直面していることを指摘している。しかし、こうしたディスアビリティの解消に向けてこの考え方が提示するのは、社会にそ

の責任を問い、社会的解決を模索するという方向性ではない。この場合の社会的責任はせいぜい国が難病指定して治療法確立のために研究を後押しすることにすぎず、偏見や差別から解放されるためには、最終的に当事者が治療を受けることが必要だというものだ。これは、社会の側の態度を問題の所在として告発しているにも関わらず、その解決の場所として定められているのは、個人の身体なのである。インペアメントが治ればディスアビリティは解消されるという主張であるので、結局のところ障害の個人モデルに収束してしまう。しかし、西倉が行ったインタビューによれば、社会の変革を求めていたのは一人のみで、自分が経験している問題の所在が社会にあると認識しながらも、社会にその責任を問うことなく、極めて個人的な、カムフラージュメイクで隠すなどの方法でやり過ごしているという。この没問題化状態に一石を投じる意味も含めて社会モデルの立場をとることに意味があると考える。

立岩(2004)は、自ら離れることのない姿・形にまつわる苦痛について、興味深い考察をしている。「姿・形で好かれたり嫌われたりということがある。(中略)姿・形は個別の人のものだが機能は代替可能であるとは必ずしも言えない。(中略)[「姿・形」と「機能」とは]相手にとっての必要・評価のあり方も同じで、自らにとっての逃れ難さも同じだとして、何が違うのか。それが『私』と関わるその関わり方が異なることがあるということではないか。例えば私はその私への評価が気になるのだが、容姿が評価される要素であるとき、それは自分に密着してあり、他の人とは代替できないものとして、あるいは代替したら意味がないものとしてあるなら、このことから逃れ難さが生じてくる。もちろんできることも私の意味、私への評価に関わってくるのだが、しかしそれは、(中略)かなりの部分はとり外すことができる。それは、すること(の少なくともかなりの部分)は自分でしなくてもすむことだからだ。それに対して、姿・形の場合はどうか。」(立岩 2004:309)

立岩が述べているのは、「できないこと」の多くは他者にやってもらったり別の手段を用いたりして代替可能であるが『姿・形』に関わる差異はそういうわけにいかないということである。自分でする(しかない、することに意味がある)しない(方がよい、しなくてもよい)という境地はときに微妙で可変的なところもある。例えば物理的な移動でも、目的地につくことだけが目的なら、乗り物を使ったり他の人に運転してもらったりして、等価の、あるいは自分で行うより簡単により結果が得られる場合もある。(ibid.:86)すなわち、「私」と「できる/できないこと」は、かなりの部分は切り離すことができるのである。これに対して、『姿・形』に関わる差異は、人に代わってもらえることはできるだろうか。「私」と容姿のあり方は切り離すことができるだろうか。例えば、誰かの容姿と取り替えることができるとする。誰かの容姿では他者と出会い、関係を作っていくことはできるのだろうか。もしできたとしても、それはもはや私と他者とではなく、その誰かと他者の間になされた出会いであり、築かれた関係でしかない。代替したら意味がないのだ。このように、機能はさまざまに補うことができるのに対して、姿・形自体はその個人に残る。前章の「他人の顔」でも、男は他人になりすまし妻の誘惑に成功するが、結局は代替できない自分の身体と、他人になりきれず妻の不貞が明らかになったことに激しく葛藤を抱くことになる。

ここまでの議論をまとめると、ユニークフェイスを障害に包摂することなくこの問題に対する社会的認知や専門的援助を要求していくことは、ユニークフェイスの問題経験を可視化していく上で必要なことである。「何かができない」という問題と「容姿のあり方が異

なる」という問題を区別し、現実当事者が多大な不利益を被っているにも関わらず、それがまったくといってよいほど認識されていないことの不当性を訴えていくことで、社会的な不認知の軽減が図れないだろうか。

3. 2 対面的相互行為における困難の軽減

どのように困難を軽減するかを考えると、ひとつはユニークフェイス当事者が相互行為を管理するという方法と、彼らと居合わせる私たちの側が相互行為を修正するという方法がある。当事者が相互行為を管理するための方法としては、カムフラージュメイクが筆頭にあげられる。ここでは深く言及しないが、初対面の場においては大きく効果があると言える。見た目だけで避けられるのを防ぐなど、カムフラージュメイクはユニークフェイス当事者が相互行為の展開や関係の構築を妨げないようにするために有効である。加えて、当事者は、カムフラージュメイクに頼らず、じろじろ見られたら先手を打ってほほえみを返したり、笑顔でおじぎをするなど、当事者自身が不快にならないためのスキルを身に付けている。こうしたスキルを駆使することは、相互行為のルールが明瞭ではなく、相手がユニークフェイス当事者に対してどう反応してよいか分からないでいる状況において有効である。相手の善意や援助をあてにすることなく自分ひとりで実践できるという利点がある。

しかし、当事者が対面的相互行為において経験している困難の軽減策や改善を当人たちのみに課すならば、それは問題である。ディスアビリティの社会的責任を問わずにすませてしまうからだ。障害の社会モデルが要請することのひとつに、マジョリティが「普通」や「標準」に納まらない人々を受け入れるように差別的態度を改めることがある。否定的な態度や偏見によってユニークフェイスは作られているといつてよい。1章で触れたゴッフマンの主張を思い出そう。スティグマは個人の属性でなく関係の中で生起する現象だということである。繰り返しになるが、ユニークフェイスをユニークフェイスとしたらしめるのは、否定的な反応を向ける側がいるからなのである。それなのに、当事者に相互行為を管理するという方法を課すだけで済ませてしまうのは、スティグマ化という相互行為レベルの問題を、相互行為の管理能力という個人レベルの問題へとすり替えるということになり、これまでの議論が台無しになってしまう。ユニークフェイスの問題を社会レベルで考えるために、私たちがすべきことを明らかにする必要がある。

石井(1999)は「侮辱しない、じっと見つめない、だけど無視をしない」という「好意ある無関心」というものを社会で共有することを提案している。これはよしもと(2004)がのべているような「出すぎでも引っ込みすぎでもない承認のまなざし」に近いものであると考えられる。ただし、このまなざしは、知り合いになる段階のもので、見知らぬ者に対するものではない。しかし、「好意ある無関心」の先には、これがあるのではないか。

本来は対語とも言われることも多い好意と無関心だが、どのようなことなのだろうか。ユニークフェイス当事者がいれば、どうしても目に入ってしまう。とはいえ、過度の関心(=凝視や侮辱)を向けないという対処と、反対に過度の無関心(=無視)を示さないという対処や、化粧で何かを隠しているのではないかと思っても、見知らぬ人にはあえて過度の関心(=凝視、質問)を向けないという対処が求められる。

ゴッフマンの「敬意」という理論について、2章で触れた。ユニークフェイス当事者に向けられる凝視や無視を通常の相互行為の変形として理解した。それを踏まえると、過度の関心は、相手の領域を侵さずに一定の社会的距離を保つという「回避儀礼」の欠落を意味している。同じように、過度の無関心は相手に対する気づきや評価を伝えるという「提示儀礼」の欠落を意味している。つまり、私たちに求められている「好意ある無関心」とは、「回避儀礼」と「提示儀礼」をごく当たり前に行うことである。

ゴッフマンは「相手をちらっとは見るが、その時の表情は相手の存在を認識したことを表す程度にとどめるのが普通である。そして次の瞬間にすぐ視線を逸らし、相手に対して特別の好奇心や特別の意図がないことを示す」ことを「儀礼的無関心」としている。石井が求めているのは、このごく普通にやっている「儀礼的無関心」をユニークフェイス当事者にも求めているのではないか。これは、日ごろ私たちがごく自然にやっていることにすぎない。すなわち、「変形」している相互行為を通常の形に「修正」すればよいのだ。

これは難しいことなのかもしれない。意識しまいとすればするほど、かえってぎこちなくなるがよくあると考えられる。オバタ(2001)も、「なるほど了解！と頷きたいが、はたしてそれは容易なことか。『さりげなく見守る姿勢』を意識すればするほど、『ぎこちなく見つめたり、無視したり』してしまいそうなのは私だけではないと思う」と述べている。ユニークフェイス当事者を前にして、ごく自然に接することはすぐにはできないかもしれない。しかし、そうできている人がいるのも事実である。顔を巡る新しいコミュニケーション方法を、誰もと築いていくことが、当事者の生きづらさを軽減し、より良い社会の構築につながる。顔が「普通」であり、何不自由ない容姿を持っている人も、無関係に思わず、他人ごとと思わず、まずは視線について改めて考えることを、本稿を読んだ方に要請したい。

おわりに

本稿では、ユニークフェイスの生きづらさをどう軽減していくかという問題を取り上げた。相互行為のあり方を見直し、ユニークフェイス当事者に対しては、非当事者間では当たり前に行われていることが変形してしまっていることを明らかにした。それを修正し、ごく当たり前のまなざしを自然に向けることを提唱し、結論とした。この問題は、日本ではここ十数年で研究が進められてきたもので、比較的新しい研究対象といってよい。まだまだ支援のバリエーションは少なく、社会的認知も進んでない。友人に、何の論文を書いているか聞かれても、用語の説明から行わなければならない、そのことを痛感した。具体的な援助の方法やセルフヘルプ・グループについては触れられなかったが、それこそがユニークフェイス当事者にとっては必要であるので、本稿で扱えなかったことは残念だ。

論文を書き始めた当初、ユニークフェイスを、当事者が受け止める、受容するという言葉を用いて、論を進めようとしていた。しかし、この問題は受容が簡単ではないし、受容するべきでもないことに気が付いた。何かを何の不満もなく、完全に受け入れることはできるのだろうか。例えば、ユニークフェイスでなくても自分の容姿に完全に満足している

人は、多いとはいええないし、他の問題に対しても、完全なる適応をしている人はいないのではないか。社会の現状への全くの肯定を想像することを想像することはできないし、グロテスクでさえあると、草柳(2004)は指摘する。社会の現状と自己との間に、適応や同一化を拒むような何ものかを感じ得ることは、私たちにとって非常にノーマルなことだ。ユニークフェイスの問題に限らず、社会に対して声を上げることは、必要なことである。

本稿執筆の本当に最後の頃、インターネットであるニュースを見た。「『まだら肌』のモデルが話題」。カナダ出身のウィニー・ハーロウという女性についてだった。彼女は肌の一部の色素がところどころ無くなってしまいう尋常性白斑という病気で、ユニークフェイス当事者である。ハーロウは、アメリカのオーディション番組に出演し、数多くの候補者の中から、まさにユニークな外見が助けとなり最新シーズンの出演者になったという。人と違う見た目がオリジナリティとなる、ということを彼女は体現している。極めてポジティブな考え方が欧米では身近になりつつある。このような流れがあることに、とても勇気づけられた。未来の当たり前の先駆者として、一翼を担うスーパーモデルになってほしいと強く思う。

筆者はユニークフェイス当事者に近い者として、見た目について関心があり、見た目は自己の形成に大きく影響していると考えている。高校生の時に読んだ石井政之の本は衝撃的だった。自分も見た目については考える機会が多かったが、ここまで分析し、研究したものがあつたことを知り、石井の生き方にも驚かされた。大学入学当時は、何を研究すべきか悩み、真面目とは言えない学生だったが、このテーマを扱えるゼミに入り、本当にやりたいことが見えた。ずっと頭で思い続けていたことが卒業前に書くことで形にできたことを喜ばしく思う。集大成としてのこの論文を執筆できたことが嬉しい。

参考・引用文献

安部公房, 1964, 『他人の顔』 講談社

Bull, Ray & Nichola Rumsey, 1988, "The social psychology of Facial Appearance", Springer Verlag. (=1995 仁平義明 (監訳) 『人間にとって顔とは何か—心理学からみた容貌の影響』 講談社)

大坊郁夫, 2001, 「化粧と顔の美意識」 高木修 (監修) 『化粧行動の社会心理学』 北大路書房

藤井輝明, 2005, 『この顔でよかった—コンプレックスがあるから人は幸せになれる』 ダイヤモンド社

藤井輝明 (編), 2001, 『顔とトラウマ—医療・看護・教育における実践活動』 かもがわ出版

Goffman, Erving., 1963, "Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity", Prentice-Hall. (=2009 石黒毅 (訳) 『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティ

ティ』せりか書房)

Goffman, Erving., 1967, "Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior", Doubleday and Company (=2002 浅井敏夫 (訳) 『儀礼としての相互行為<新訳版>』法政大学出版局)

星加良司, 2007, 『障害とは何か—ディスアビリティの社会理論に向けて』生活書院

石井政之, 1999, 『顔面漂流記—アザをもつジャーナリスト』かもがわ出版

石井政之・藤井輝明・松本学 (編), 2001, 『見つめられる顔—ユニークフェイスの体験』高文研

石川准・倉本智明 (編), 2002, 『障害学の主張』明石書店 「ディスアビリティの削減, インペアメントの変換」

Kitsuse, John. I., 1980 "Coming Out All Over: Deviants and Politics of Social Problems", Social Problems

Kleinman, Arthur, 1988 "The Illness Narratives: Suffering, Healing and the Human Condition", Basic Books. (=1996, 江口重幸・五木田紳・上野豪志 (訳) 『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房)

草柳千早, 2004, 『「曖昧な生きづらさ」と社会—クレーム申し立ての社会学』世界思想社
Lee, Jisun 2003 "Jisun, I love you", Ire Publishing. (=2004 金重明 (訳) 『チソン, 愛してるよ。』アスペクト)

町野美和, 1985, 「女の価値は顔」駒尺喜美 (編) 『女を装う』勁草書房

松本学, 2000, 「隠ぺいされた生きづらさ—『ふつう』と『ふつうでない』の間の容貌」『看護学雑誌』

松本学・石井政之・藤井輝明 (編), 2001, 『知っていますか? ユニークフェイス—問—答』解放出版社

三島由紀夫, 1965, 「現代小説の三方向」, 『展望』

西倉実季, 2009, 『顔にあざのある女性たち—「問題経験の語り」の社会学』生活書院

オバタカズユキ, 2001 「『障害者』と『健常者』の間で揺れる思いを丹念に」, 『論座』

田垣正晋 (編), 2006, 『障害・病いと「ふつう」のはざままで—軽度障害者どっちつかずのジレンマを語る』明石書店

立岩真也, 2004, 『自由の平等—簡単に別な姿の世界』岩波書店

好井裕明 (編), 2009, 『排除と差別の社会学』有斐閣選書

よしもとばなな, 2004, 『海のふた』ロッキング・オン